

介護夜話スペシャル

Kaigo Yota Banashi

三好春樹
Haruki Miyoshi

介護職よ、死ぬんじゃない

今回の大震災・津波で、老人介護現場は多大な被害を受けた。海岸沿いに建てられた老人施設は避難する時間も人手も足りないまま、老人とスタッフの多くが一瞬にして津波に呑まれた。

私が24歳のときに就職した特養ホームは、瀬戸内海をはるかに見渡す山の中腹にあった。まだ街中に老人施設をつくらせてくれなかった時代だったからだ。しかし介護の生活化、介護施設の社会化が叫ばれるようになり（ノーマライゼーションなんて言った）、老人たちを人里離れた山奥に隔離するのではなく、街中でケアすべきだと考えられるようになった。老人にとっては住み慣れた地域を離れなくてすむし、家族も地域の人とも訪問しやすい。いいことばかりと考えられてきた。

しかし今回はそれが^{あだ}仇になったような気がしてしょうがない。要介護老人を避難させるにはマンツーマンで介護者がいたって困難である。障害老人の移乗介助、移動介助には一人ずつ以上必要だし、自立移動可能な認知症老人が従順に指示に従ってくれるはずもないから、これも一人ずつ以上いるだろう。今回のような短時間の避難はとても無理だと思える。だとしたら、たとえ人里離れていようが高地に建設するしかないのだろう。そこを一般の人たちの避難所と

して訓練のたびに住民が集まるようにすれば訪問する人も増えるかもしれない。

思い出してみれば、私がかつて勤めた特養ホームは、交通の便が悪くても家族の訪問は他施設の3倍もあったし、地域との交流も豊かだった。空間的距離なんか関係の力と工夫で超えられるのだ。

この話、津波に襲われた地域だけの話ではない。日本中どこでも明日にでも海の近くなら起こりうると思ったほうがいい。だって神戸も新潟も予想されていない地域で大地震が起きたではないか。津波こそ生じなかったが。太平洋岸だろうが日本海側だろうが、瀬戸内海沿岸だろうが津波がやってくるかもしれないという想定が必要だろう。



大きな施設には弊害が多いとして、小規模施設が増えたことも仇になったのではないか。その多くはやはり市街地につくられていて、海岸沿いの小施設が無数にある。定員9人のグループホームでは、とにかく利用者を2台の車に押し込むようにして避難したという。でもそれは昼間だから可能で、夜間なら何もできなかっただろうと言っている。

グループホームの火災が何度かあった。夜勤一人では何もできない。そこで、近所の人にかけてもらうための日頃の交流やシステムをつくり始めた。でも火災ならともかく、地震と津波では近所の人にもそんな余裕はない。



あらゆる死が悲しくいたたまれない。だが次のような死はなんとも痛ましい。あるヘルパーは在宅の利用者を車で助けに行きその家で亡くなったという。ある施設スタッフは、何度か老人を車いすで高台に避難させ、もう一度施設に戻って帰らなかった。私は5月号で、患者を見捨てて逃げたといわれている病院関係者を引き合いに出して、「頭が下がる」と書いた。

だが頭を上げて言わねばならないと思う。こうした話を美談にしてはならない、と。かつて長野県で山崩れによって特養ホームの入所老人が多数亡くなるという事件があった。それについてある高名な施設長がこう言ったというのだ。「老人が亡くなって職員が亡くなっていないというのはどういうことだ」と。

「実情も知らないでよくこんなことが言えたもんだ」と現場の人は本当に怒っていた。あつという間の出来事だったからだ。

この当時高名な施設長は、厚労省を批判するなど反体制的言動で知られる人だった。私は思った。「体制と反体制はいっしょだ」と。

あたかも、「老人のために死ぬ」と脅迫するかのような発言は、「国のために死ぬ、殺せ」というのとほとんど同じである。国なんかのために死んじゃいけない、殺しちゃいけない。介護職よ、特に心優しい介護職よ、老人のためにも死んじゃいけない。



消防庁や自衛隊の人命救助のプロたちは、丈夫な身体をもっているうえに毎日のように厳しい訓練を受けている。高度に専門的な機器も装備している。そのプロたちが人命救助するときには、まず自分の安全を確保する。そうでなければ救助しないのだ。

介護職は食事、排泄、入浴介助のプロではあるが、人命救助のプロではない。だとしたら、もっと自分の身の安全を優先しなければならない。

老人を助けようとして亡くなった彼らは決して死を覚悟していたのではないと思う。二人でいっしょに生きていたに違いない。これはそれがうまくいかなかった悲劇である。美談ではない。

私はあえて訴えたい。老人といっしょに生きていたいという気持ちは私たち介護職には十分すぎるくらい理解できる。しかし、それが無理だと思ったら、自分一人だけでも生きるべきだ、と。老人を放っておけないと思う人だからこそ生きてほしい、と。

それに対して罪悪感を感じなくてもいいと私は思う。感じるのは無力感だけでいい。そしてこの無力感は介護現場で私たちがいつも感じ続けてきたものである。介護職の共感とはこの無力感の共有だったはずだ。そして人間同士の本当の共感もじつはそうではないか。

それに、あなたがいっしょに生きていたいと思うような老人なら、危機が迫ったとき「私はいいからあなただけ逃げなさい」と言ってくれると思う。いや、そりゃわからないけど、そう思い込んでしまおう。この思い込みは許されると思うのだ。

※写真：映画「無常素描」より